

氏 名	遠山 いずみ
学 位 の 種 類	博士 (比較文明学)
報 告 番 号	甲第415号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	「セルフ・ポートレート」の可能性について―「自己」「像」「同一性」とは別様の、松井冬子の作品を例に
審 査 委 員	(主査) 佐々木 一也 林 文孝 北山 晴一 (立教大学名誉教授・元立教大学文学研究科 比較文明学専攻教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

当該論文は10章、40節、プロローグ、エピローグ、6編の副論からなる。節は略して目次を示す。

プロローグ：現代の「セルフ・ポートレート」、はじまりまでの、(状況)

副論1. パスポート写真と「アイデンティティ」

I. 「アイデンティティ」としての「セルフ・ポートレート」をめぐって、(先行研究と問題設定)

副論2. J. ボードリヤールによる「個性」

II. 像へ／像から

III. 松井冬子と「松井冬子」イメージ

IV. 松井冬子の作品、描かれているもの

V. 石内都の作品、「見えない」もの・「ない」ものをあらわす

副論3. 「イメージ」

副論4. A. リンギスによる他者と自分

VI. 「セルフ・ポートレート」の中で

副論5. 「イメージ」と「アレゴリー」

VII. 松井冬子の作品、どのように描かれるかの礎

VIII. 松井冬子の作品、どのように描かれるか技法と特異性

IX. 松井冬子の作品、あらわれるもの、「ある」と「ない」の間

X. 「イメージ」としての「影」、「影」の触・視

副論6. 不可知のあなたから、「わからない」ものが呼びかけてくる

エピローグ：「セルフ・ポートレート」これから・これからも、(展望)

文献表・図版出典

## (2) 論文の内容要旨

本論文における考究の原点は、現代社会でのセルフ・ポートレート of 氾濫という事実である。それらは無限に多様な様式を持っている。一見、無秩序で不愉快でさえあるそれらは、単に消費され無視されるべきではない。それらは揺れ動く自己像、アイデンティティの実態を反映する現象と見ることができる。徹底的な合理的アイデンティティ認証技術が進んでいるにも関わらず、アナログな様式でセルフ・ポートレートが表現されていることから、基準の硬直化を避けようとする人間の営みが見て取れる。その事態を、現代において特異な自己像表現者として話題になる松井冬子の作品を手掛かりに、その作品が評価される時代の文脈を追い、今求められるセルフ・ポートレートの存在性格を、自己という揺れ動く存在者のダイナミックな性格に忠実に捉えようとしている。

I：自己と像・肖像と同一性との重なりを問題の原点とする。ボードリヤールとナンシーが論じなかったことを照射し、非自律的肖像を考察すべき方向とする。

II：セルフ・ポートレートと自分および自分の身体の位相を問う。テクノサイエンス全盛時代にあつて、身体と精神をつなぐ電脳、サイボーグはサイバースペースを生きる戦略だが、それがセルフ・ポートレートには当てはまらないことを松井冬子の作品を手掛かりに明らかにする。

III：松井作品を概観し、セルフ・ポートレートとしての可能性を見る。自傷的、トラウマ絵画と言われるが、作品自体を見ると違う様相が見える。作者を投影しすぎてはいけなし、商業主義的観点から見てもいけない。

IV：松井作品に描かれているものは何か、また、いかにセルフ・ポートレートであるか、ないか、を検討する。図・像として見えるものに囚われると深層の意味を取り逃がしてしまう。何が、だけでなく、どのように描かれているか、を見ることにより、見逃されてきた部分が見える。

V：松井の作品理解の補助線として、石内都作品をもとに、みえないものとみえるもの、あらわれるものとあらわれないもの、不在のものを表すことができることを検証する。作品が喚起する感覚や記憶を介し、直接視覚に訴えてくるもの以外のイメージが、場所、空間を超えて現れてくる。作品がそのような力のあることを理解することによって、松井作品も違って見えてくるのだ。

VI：作品にあらわれるイメージを、作品に向かう人が受容する過程を A. リングスの議論に沿いながら整理する。イメージは理解不能、意味不明のものとして、不意に到来する。それらは排除されるべき激情 *passion* でありながら、その人の完全な受動 *passion* のうちにあらわれる。本人の意志やコントロールの及ばない「他者」(リングス)によって襲来されるのだ。

VII：松井作品の表現の基礎、制作・技法、意図・着想の源流を辿って探る。一方で西洋画の正統的事実性・客観性と普遍性を志向していながら、日本画の伝統にも依拠して線と線描に強いこだわりを持っている。

VIII：描かれ方に着目する。絹、岩絵の具、形未満の無数の描線が使用されている。

IX：絵画中のイメージと松井本人とのつながり。視覚的イメージの背後にある複合的イメージは影イメージとして「みえないもの」から発して作品の底に沈殿している。それはリングスの言う違和感を醸し出す他者として松井本人を刺激する。松井の「自傷」と「痛み」は、この自己であり他者である自分のイメージ同士の制御できない闘いであり、受動・激情 *passion* なのだ。

X：影イメージの受容が自己の中の変化と動きを認めて生の肯定に至ることを説く。セルフ・ポートレートは現代のテクノサイエンス文化にあつて、自己が生としての特性を自覚し、それを実現するための、厳密ではないが、生き生きとした変動しつつあるダイナミックな営みなのだ。影イメージは本人自体からはずれた表現であり、テクニカルな理解から漏れる本人の分身なのだ。人間であるということこそが、そのようなセルフ・ポートレート表現になお拘る理由なのだ。

エピローグ：自己の生成とは自一他の界面における両者のせめぎ合いであり、作品と制作は分かちがたく一体である。作品は人がそこに向かうはずの展開し続ける新たな相を示す。人は生きる限り、セルフ・ポートレートを更新し続けなければならない存在者なのだ。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

本論文は以下の諸点において独自性を持ち、高く評価される。

第一に、申請者の問題意識が、現代文明において単なる消費文化のひとつと見られがちなセルフ・ポートレート作成という営みを通して、もはや直接的に表現されにくくなった人間性の深部を読み取ることにある。記号性が偏在する現代の差異の文化において、単に差異を生み出すための風変わりな表現方法が、むしろ、消費によって消尽されることの不可能な確固たる人間という存在者の生の存在様態を浮き彫りにしている、という事態を本論文は活写している。

第二に、松井冬子作品論としてまとまった優れた内容を持っていることである。本論文は松井冬子のいわゆる「自傷的」で「痛み」を見る者に与える絵画を、消費社会的に売り物であるための特異な際物としてみるのでもなく、前面に出ている女性特有の身体性ゆえに社会学ジェンダー論的に論じるのでもない。むしろ純粋に西洋画の伝統と日本画の伝統の中に置いて、真正面から絵画作品としてその技法論から見直す。松井作品にレオナルド・ダ・ヴィンチ以来の技法とのつながりを見て、正統的西洋画技法を踏まえた上で、絹に描く際に用いる独自の線描法を用いる点にオーソドックスな日本画技法との技法的融合を指摘する。それが、ダ・ヴィンチのスフマート(「煙のような」という意味でのぼかし技法)に通じる「フェルト化する線」の非常に効果的な使い方に現れているとの評価につながる。この描き方の意味が、毀誉褒貶が激しく評価の定まらない松井作品に申請者の問題意識に寄り添った理解を与える根拠となる。そして松井冬子作品に生きた人間の独自表現であるセルフ・ポートレートになることを可能性にする力を与える。これは申請者の絵画制作技法に通じた独創的絵画理解およびセルフ・ポートレート概念理解の賜物である。また、このように論じられることが、このテーマに松井冬子作品を例として取り上げたことの正当性の根拠を示す。

第三に、独自の分析概念を導入していることである。上記の点と連動するのだが、松井冬子作品理解に際して申請者は、ボードリヤール、A.リンギス、J=L.ナンシーなどの現代思想家の概念や、H.G.ガダマーの解釈学哲学の発想を基盤として使って理解を形成する一方で、「影のイメージ」「エッジの効いた線」「フェルト化する線」などの絵画を読み解く際の独自の概念を規定しつつ使用することから、効果的に松井作品の生きた人間にとっての積極的意味を剔抉することに成功している。このことは絵画表現が現代文明で普遍的に通じる表現力を持つことを明らかにしている。

第四に、絵画論と自我論を融合させ、学際的研究領域開拓を目指す比較文明学研究に新たな道を拓いたことである。本論文は松井冬子の絵画作品を論じ、一面優れた松井冬子論、絵画論であるのだが、それにとどまらずに、絵画論から自我論が重要論点として自然に導き出される。現代の自我やアイデンティティは必ずしも哲学概念だけによって解明されるべきではなく、絵画作品とその作者の一体性を丹念に見てゆくことの中にこそ、その精髓が現れてくるように記述されている。この論文は哲学的問題が絵画そのものの理解の問題でもあることを示しており、哲学的理論と絵画論が一体のものとして成立する可能性を示している。松井冬子の絵画作品が、セルフ・ポートレートとして捉えられることによって、自我論の絵画による表現として見られ得るということを示した。

以上、本論文の特徴およびその優れた点を列記した。だが、本論文の最大の特徴であり優れた点は、本論文が現代という時代の文明の特徴を、セルフ・ポートレートという切り口から描き出している点にあると思われる。それは消費文化という欲望に突き動かされた人間の行動様式が、どれほど表面的に様式化され、市場における相互比較によってのみ評価され、相対的価値しか持ちえない状態に置かれてしまったとしても、その奥には常に人間性の深い本質が、特定はされないものの隠れて機能しているのであり、現代文明は決して市場操作でもって動かされない内奥を保持していることを力強く論じている。その意味で、本論文は現代文明の見えにくい深奥を抉った優れた現代文明論だとも言うことができる。

よって、本論文は博士学位に十分に価するものと評価される。